

することができる。

## 29) 藤原定家の歯病に関する考察

On the Dental Diseases of Sadaie Fujiwara

鶴見大学 戸出 一郎  
別部 智司  
佐藤 恭道  
森田 武  
雨宮 義弘

Ichiro Tode, Satoshi Beppu, Yasumichi Sato,  
Takeshi Morita and Yoshihiro Amemiya,  
Tsurumi University, School of Dental Medi-  
cine

藤原定家は応保2年(1162年)、藤原俊成の子として京に生れた。18歳の時、内昇殿を許され、以後60年間、高倉・後白河・後鳥羽帝に仕えた。

定家の日記「明月記」は、治承4年(1180年)から嘉禎元年(1235年)までのものが現存している。

「明月記」には政治・公事典章から人情風俗に至る公私の問題と共に、定家とその家族の生活が詳しく記録されている。

「明月記」によれば、定家は少年時代に大病を患い、それ以後病が絶えず、呼吸器・消化器・泌尿器・皮膚・眼・口腔等の疾患や、身体痛・風熱病・寒病・発り等の症状に悩まされ、更に心神悩・病氣不快・所労等の言葉で表現される病感の訴えが700回以上も見出される。拙論では、この中で口腔に関する疾患のみを選び出し、定家が患った歯牙疾患について考察を試みた。

歯病に関する最初の記録は、43歳の元久元年3月24日、「歯痛む。雨降り、心神冷然たり。出仕せず」とある。

建暦2年8月22日、51歳の時、「歯取の老嫗を喚び、歯を取らしむ」とあり、翌建保元年4月15日から歯を病み、18日には「歯の病、日を逐いて堪え難し。老嫗(先年度々来る)を召しに遣し、折れたる歯を取らしめ了んぬ。根を穿ち取らんと欲すと雖も取り得ず、大なる苦痛堪え難し。終日痛む。使を以て清成朝臣に問う。この事驚くべからず。漸々に減ずべき由、示し送る」とある。当

時残根の抜歯を曲りなりにもなし得たこと、和氣清成が抜歯後疼痛の予後をよく洞察していたことは注目に値する。

60歳台になると歯病の記録が急に増えてくる。嘉禄元年12月30日、64歳の時、「去年より霜葉の如く揺れ落ちんと欲するの或齒、遂に抜け落ち了んぬ。その跡すでに愈ゆるが如く、血の気なし。暮齡の然らしむ。何をかなさんや。(この所、奇とせず。これを取りて京に歸るべきなり)」とある。これは重度の慢性辺縁性歯周炎の症状と思われる。

寛喜2年4月4日、69歳の時、「源氏を書くの間、口熱おこり歯痛む。朽齒極めて弱し。苧を付けて少年嬰兒の如く引き落し了んぬ」とある。これも前例と同じく歯牙が弛緩動揺していたのであろう。

その他、顔面の発熱腫脹を訴える記事が多く見出される。その中には面疔によるものが2、3あるが、大部分は歯牙に起因する熱腫である。その場合、歯肉或は顔面に蛭を吸着させて瀉血をし、歯肉に膿瘍を形成した場合には鍼により排膿している。

蛭による瀉血は屢々行われ、かなり効果があったようで、定家自身、天福元年4月8日「未時許りに蛭を飼う、頤下、年來頻りにこれを好む」と述べている。

「明月記」における上述の記録を総合して、藤原定家は60歳台以後、慢性辺縁性歯周炎に罹患していたものと推測する。

## 30) 歯科医史からみた古事記

大阪市 杉本 茂春

1

古文の歯は周代の遊牧民によって造られ、猛獣、獅虎の口歯を象形したが、漢字の歯は殷代に造られ、人の口中の歯を象形した。

後世、組織的に整備されて現在の歯となり、我が国では独自の訓みで、fa, ha と発音した。

一方、古事記は西紀681年ごろ提唱され、和銅年間(711~712)に成立した。この時期、齒はまだない。